

西行桜

禅竹作

ツレ男 都人

立衆一同 花見の人々

ワキ 西行

狂言 寺男

シテ 桜の精

地は

山城

季は

三月

男詞

「かやうに候ふ者は。下京辺に住居仕る者にて候。

さても我春になり候へば。こゝかしこの花をなが

め。さながら山野に日を送り候。昨日は東山地主

の桜を一見仕りて候。今日は又西山西行の菴室の

花。盛なるよし承り及び候ふ程に。花見の人々を

伴なひ。唯今西山西行の菴室へと急ぎ候。

一同道行

「百千鳥。囀る春は物毎に。く。あらたまりゆく

日数経て。頃も弥生の空なれや。やよとゞまりて
花の友。知るも知らぬも諸共に。誰も花なる心か
な。く。

男詞

「急ぎ候ふ程に。是はゝや西行の菴室に着きて候。

暫く皆々御待ち候へ。某案内を申さうするにて候。

如何に案内申し候。

狂言

「誰にて渡り候ふぞ。

男 「さん候是は都方の者にて候ふが。此御菴室の花。

狂言「易き間の御事にて候へども。禁制にて候ふさりながら。御機嫌を見てそと申して見うずるにて候。盛なる由承り及び。遙々是まで参りて候。そと御見せ候へ。

狂言「夫れ春の花は上求本来の梢に顯はれ。秋の月下化冥暗の水に宿る。誰か知る行く水に。三伏の夏も暫く御待ち候へ。

男 「心得申し候。

ワキサシ
「夫れ春の花は上求本来の梢に顯はれ。秋の月下化冥暗の水に宿る。誰か知る行く水に。三伏の夏も暫く御待ち候へ。

「心得申し候。

詞
「さりながら四つの時にも勝れたるは花実の折なるべし。あらおもしろや候。

狂言「日本一の御機嫌にて候ふやがて申さう。如何に申し候。都より此御庭の花を見たき由申して。是まで皆々御出でにて候。

ワキ詞
「何と都よりと申して。此菴室の花をながめん為め

に。是まで皆々來り給ふと申すか。

狂言
「さん候。」

ワキ 「およそ洛陽の花盛。何処もと云ひながら。西行が
菴室の花。花も一木我も独りと見る物を。花故ありかを知られん事いかゞなれども。是まで遙々來りたる志を。見せでは如何で帰すべき。あの柴垣の戸を開き内へ入れ候へ。」

狂言 「畏つて候。如何に方々へ申し候。よき御機嫌に申

して候へば。見せ申せとの御事にて候ふ程に。急いで此方へ御出で候へ。」

男詞
「心得申し候。」

花見一同

「桜花咲きにけらしな足引の。山のかひより見えしまゝ。此木の本に立ち寄れば。」

ワキ 「我は又心ことなる花の本に。飛花落葉を観じつゝ。」

「貴賤群集の色々に。心の花も盛んにて。」

一同 「貴賤群集の色々に。心の花も盛んにて。」

ワキ 「昔の春に帰る有様。

一同 「隠れ所の山といへども。

ワキ 「さながら花の。

一同 「都なれば。

地 「捨人も。花には何と隠家の。く。所は嵯峨の奥
なれども。春に訪はれて山までも。浮世のさがに
なる物を。實にや捨てゝだに。此世の外はなき物
を。何くか終の住家なる。く。

ワキ詞

「如何に面々。是まで遙々來り給ふ志。かへすぐ
も優しうこそ候へさりながら。捨てゝ住む世の友
とては。花独りなる木の本に。身には待たれぬ花
の友。少し心の外なれば。花見んと群れつゝ人の
来るのみぞ。あたら桜のとがには有りける。

地 「あたら桜の陰暮れて。月になる夜の木の本に。家
路忘れて諸共に。今宵は花の下伏して。夜と共に
ながめ明かさん。

シテ

「埋木の人知れぬ身と沈めども。心の花は残りけるぞや。花見んと群れつゝ人の来るのみぞ。あたら桜のとがには有りける。

ワキ
「不思議やな朽ちたる花の空木より。白髪の老人顕はれて。西行が歌を詠ずる有様。さも不思議なる仁体なり。

シテ詞
「是は夢中の翁なるが。今い詠歌の心を猶も。尋ねん為めに來りたり。

ワキ
「そもそもや夢中の翁とは。夢に来れる人なるべし。それにつきても唯今の。詠歌の心を尋ねんとは。歌に不審の有るやらん。

シテ詞
「いや上人の御歌に。何か不審の有るべきなれども。群れつゝ人の来るのみぞ。あたら桜のとがには有りける。さて桜のとがは何やらん。

ワキ
「いや是は唯浮世を厭ふ山住なるに。貴賤群集の厭はしき。心を少し詠ずるなり。

シテ詞

「おそれながら此御意こそ。少し不審に候へとよ。
浮世と見るも山と見るも。唯其人の心にあり。非
情無心の草木の。花に浮世のとがはあらじ。

「實にくく是は理なり。さてくかやうに理をなす。

御身は如何さま花木の精か。

シテ「誠は花の精なるが。此身も共に老木の桜の。

ワキ「花物いはぬ草木なれども。

シテ「とがなき謂れを木綿花の。

ワキ「影唇を。

シテ「動かすなり。

地「恥かしや老木の。花も少なく枝朽ちて。あたら桜
のとがの。なき由を申し聞く。花の精にて候ふな
り。およそ心なき草木も。花実の折は忘れめや。
草木国土皆。成仏の御法なるべし。

シテ詞

「有難や上人の御值遇に引かれて。恵の露あまねく。
花檻前に笑んで声いまだ聞かず。鳥林下に鳴いて

涙尽き難し。

地クリ「夫れ朝に落花を踏んで相伴なつて出づ。夕には飛

鳥に随つて一時に帰る。

シテサシ「九重に咲けども花の八重桜。

地「幾世の春を重ぬらん。

シテ「然るに花の名高きは。

地「まづ初花を急ぐなる。近衛殿の糸桜。

クセ「見渡せば柳桜をこき交ぜて。都は春の錦燐爛たり。

千本の桜を植ゑ置き。其色を所の名に見する。千

本の花盛。雲路や雪に残るらん。毘沙門堂の花盛。

四王天の栄花も。是にはいかで勝るべき。上なる

黒谷下河原。むかし遍昭僧正の。

シテ「浮世を厭ひし花頂山。

地「鷺の御山の花の色。枯れにし鶴の林まで。思ひ知
られてあはれなり。清水寺の地主の花。松吹く風
の音羽山。こゝは又嵐山。戸無瀬に落つる滝つ波

までも。花は大井河。井闇に雪やかゝるらん。

シテ
「すはや数添ふ時の鼓。

地
「後夜の鐘の音響きぞ添ふ。

シテ詞
「あら名残惜しの夜遊やな。惜しむべし／＼得難き
は時。逢ひ難きは友なるべし。春宵一剋価千金。

花に清香月に陰。春の夜の。

(序の舞)

ワカ
「花の陰より明け初めて。

地
「鐘をも待たぬ別れこそあれ。別れこそあれ。／＼。

シテ
「待てしばし待てしばし。夜はまだ深きぞ。

地
「白むは花の陰なりけり。よそはまだ小倉の山陰に。
残る夜桜の花の枕の。

シテ
「夢は覚めにけり。

地
「夢は覚めにけり。嵐も雪も散り敷くや。花を踏ん
では同じく惜しむ少年の。春の夜は明けにけりや。
翁さびて跡もなし。／＼。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション 『謡曲評积 第七輯』 大和田建樹 著